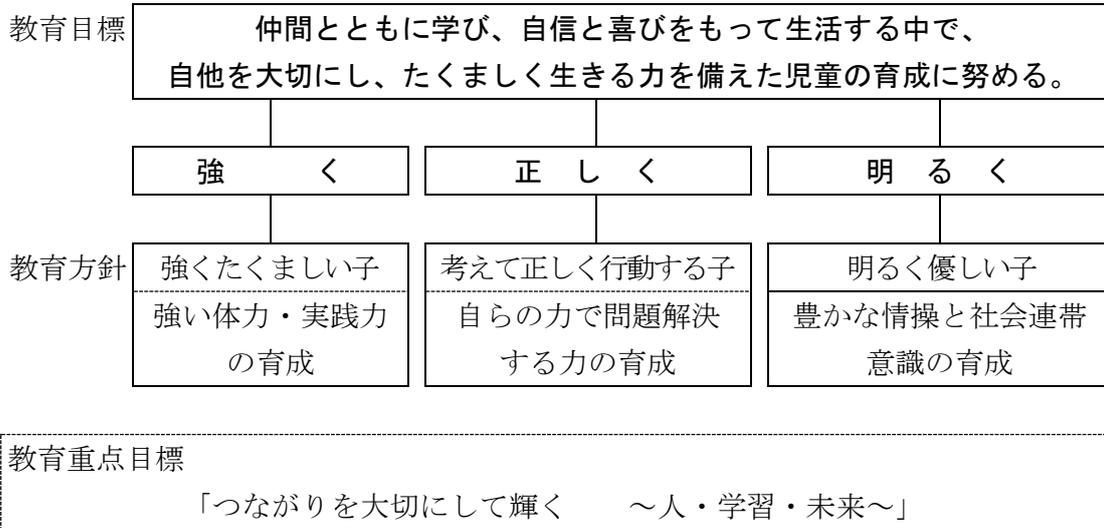


令和6年度 努力点推進計画

1 教育目標



2 本年度学校教育の努力点とその推進計画

進んで課題を探究する児童の育成

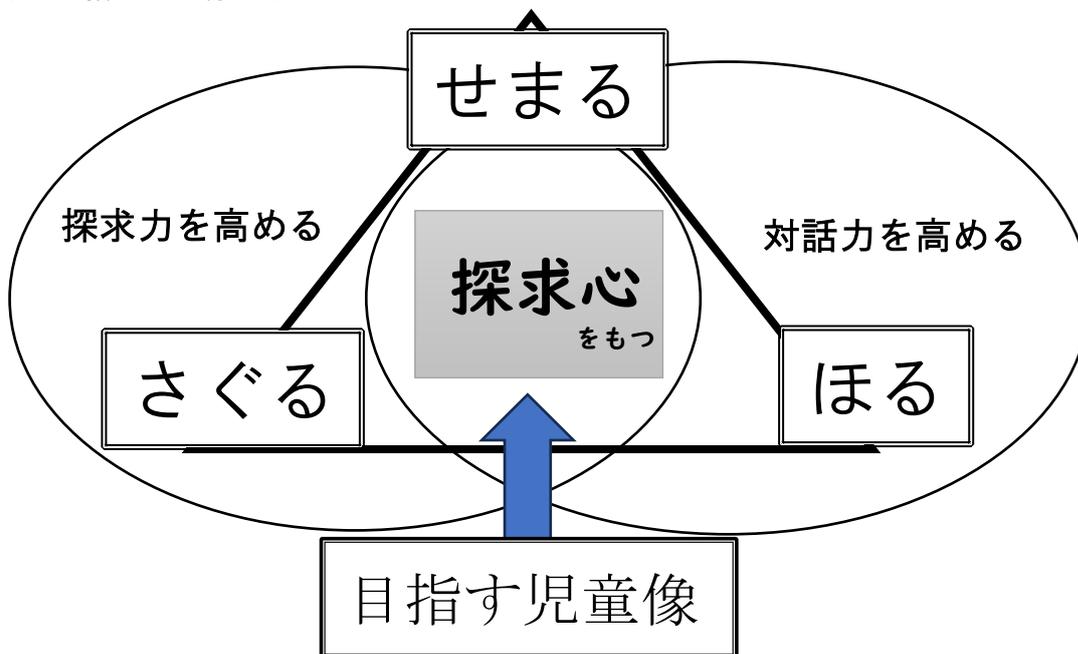
(1) 研究主題について

本校では、昨年度、語彙力や対話力を生かしながら、互いに認め合うことができる関係づくりや授業づくりを目指し、「互いに認め合う児童の育成～言葉をつなぐ活動に重点を置いて～」という研究主題のもとで実践に取り組んできた。実践の結果、行事や学習を振り返る活動や他者との共有を通して自分のよさに気づき、対話を繰り返し、言葉をつなぐ中で、他者と関わり、認め合うことに意義を感じる様子が見られた。年度末の学校評価の結果では、「言葉を大切にしたい対話をするようになってきている」という項目に対し、78%の児童が「よくあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答しており、一定の成果が得られたと考えられる。しかし、対話のスキルを身に付けることはできたが、その生かし方については十分ではなかった。

名古屋市教育振興基本計画では、ゆるやかな協同性の中で一人一人が自立して学び続ける姿を目指す「ナゴヤ学びのコンパス」が指針されている。多様な人と学び合う中で、自分に合ったペースや方法で学んだり、夢中で探求したりする姿を重視している。子どもと対話し、一人一人の思いや願いを尊重すること、子どもなりのチャレンジを大事にし、子どもの学びに伴走することが教師の役割であることが示されており、このことから、本校でこれまで取り組んできた「対話力」は、今後名古屋市の学びの基本的な考えに迫るための、重要なスキルであると考えられる。さらに、児童自らが、自分に最適な学習の進め方を探すと学習態度を育成する必要があるだろう。

そこで、今年度は、これまで培ってきた「対話力」のスキルを活用し、課題を「探究する」児童を育成したい。テーマを「進んで課題を探究する児童の育成」とし、「さぐる」「ほる」「せまる」活動を通して、児童が興味・関心のあることを見付け、探究心をもって自分なりの方法で調べたり、対話によって課題を深く追求したりする力を身に付けさせたい。

(2) 目指す児童像に迫るための手だて



児童の発達段階に応じて、以下に重点を置き、日常実践、授業実践に取り組む。

① 「さぐる」ための手立て

「さぐる」＝自らの課題を見付け、解決に向けて取り組む活動

児童が関心をもって課題に出会ったり、主体的に見付けたりすることができるようにする。

例) 気付きを引き出す教材の提示、導入の工夫、本物に触れさせる、タブレット、資料等の活用

② 「ほる」ための手立て

「ほる」＝対話を通して課題を追求する活動

R5年度は、話し合い、対話活動を行い、素地を耕した。R6年度からは、核心にせまるために、対話によって課題をほる。課題を追求するために、自分の思いや願いを伝えたり、対話によって自律して学ぶためのヒントを得たりすることができるようにする。

例) ペア・グループ・全体での話し合い活動

③ 「せまる」ための手立て

「せまる」＝「さぐる」「ほる」を融合し、課題の核心に迫る活動とする。

自分で学習方法を考えて取り組もうとする姿を引き出したい。その際、児童に学ぶ目的やゴールを示したり、学びに関わるより多くの決定を児童に委ねる場面を設定したりする。

例) タブレットの活用、本物の人・場との出会い

※ 初年度は、「さぐる」「ほる」に重点を置き、教師が「せまる」を意識して引っ張っていく。次年度以降、児童自らが「せまる」に移行していけるようにする。教師としての役割は、課題提案、軌道修正。

(3) 検証方法について

「さぐる」「ほる」「せまる」手立てについて、授業実践や児童の成果物で調査した結果から有効性を検証する。また、必要に応じて抽出児童を設定して検証したり、学校生活アンケートや教育相談アンケートを活用したりすることもできる。

(4) 環境の整備

教材・教具の整備、ICT環境の整備、プリント類の管理（データ）

(5) 組織

